

施設退所後に家庭復帰をした当事者の生活と支援

—— 社会的養護を受けた人々への生活史聞き取りを通して ——

伊 部 恭 子

〔抄 録〕

本稿の目的は、社会的養護を受けた人々への生活史聞き取り調査（2007～2010年度に実施）から、家庭復帰をした人とその家族関係・社会関係に焦点をあて、支援に関する課題を考察することである。ここでは、社会的養護のなかで、主に施設ケアを取り上げる。施設への入所前、入所中、退所後という時間的経過のなかで、当事者が、その生活とおかれている状況、家族関係、社会関係をどのようにとらえてきたのか、どのような困難や課題があり、どのように対処したのか等を明らかにし、支援の過程に則して課題を考察した。

生活史インタビューの結果、家庭復帰後にも多様な生活困難、生活課題、家族関係・社会関係における葛藤や困難、課題が生じていることが明らかになった。支援の過程、すなわちアドミッションケア、インケア、リービングケア、アフターケアにおいて考慮すべき点として、特に、退所後の支援を見通したインケアにおける支援のあり方が、当事者の生と生活の力を育み、施設退所後に困難等を抱えた時の対処の仕方や課題解決の仕方に活かされる可能性、インケアと並行して親支援を行うことの重要性が確認された。

引き続き、当事者の生活と支援について、時間軸に着目して分析し、回復に向けた支援に関する考察を深めていくことを課題とする。

キーワード：社会的養護、児童養護施設、生活史、生活支援、家庭復帰

I. は じ め に —— 研究の目的と視座

1. 研究の目的と視座

本稿の目的は、社会的養護を受けた人々への生活史聞き取り調査を通して、支援に関する課題を考察することである。特に施設ケアを取り上げ⁽¹⁾、退所後に家庭復帰をした人々へのインタビュー調査から、その生活と家族関係・社会関係に焦点をおいて検討し、支援の過程に則

して課題を探りたい。

当事者の生活史とその“語り”に着目する理由は、人間の生と生活を全体としてかつ時間軸でとらえるという観点に立ち、自己の人生を主体的に生きていく力をより強めていけるような支援とは何か、すなわち当事者にとって、リジリエンスやコンピテンスをより豊かにする支援⁽²⁾とはどのようなものであるかに関して、手がかりを得たいためである。

“生”について、藤村は、「社会学が研究対象としてきた〈生命〉〈生活〉〈生涯〉を統括するような視点が〈生〉として求められつつある」とし、それを「対象化されたものとしてだけではなく、本人によって『生きられている〈生〉』として当事者視点のもとに理解することが求められつつある」と述べている（藤村 2008：i-v）⁽³⁾。また、“生活”に関する理解について、窪田は、社会福祉援助の立場から、「援助者は、まず生活を支えるという仕事の持つ深い意義を確信していなければならない」と述べ、「生活（Life）を生命活動、日々の暮らし、人生という3つのレベルでしっかりとその全体性をつかんだ上で、それらが3つのレベル深く相互に関連しているという事実を確信を持って理解している必要がある」とする（窪田 1997：16）。

生、生活を、「当事者視点」のもとに、「3つのレベル」においてその全体性と相互の関連性をもって理解するということは、決して単純ではない。人間は一人ひとり多様な生き方、生活を営んでおり、個別的である。また、人間は個人として生きているだけではなく、時代や社会のなかで、環境との関わりにおいて生きていることも事実である。ソーシャルワーク、社会福祉援助という仕事は、まさにそこに専門性をもって介在する。したがって、社会的養護もまた、子どもの生と生活の力を育てるために、基本的信頼感と主体的に生きていく力を育み、自立・自律への歩みを支え、家族関係や社会関係の形成・維持・変容・再構築を支え、子育てをおこなうという専門性をもった「生活支援」であると考ええる。

生活を時間軸において、すなわち人生、一生涯としてとらえる場合、そのライフ・イベント（人生の出来事、一生涯における大きな出来事、特別な意味をもつあるいは転機となるような出来事）には、一般に、出生（誕生）、就学、卒業、恋愛、失恋、結婚、出産、子育て、離婚、再婚、就職、転職、失業、退職、病気、障害、死別、死などがあげられるほか、事故や災害、喪失等の体験、それらを含むトラウマとなる体験など、個々人にとって固有の意味をもつ特別な体験、出来事がある⁽⁴⁾。そのなかで、社会的養護を受けた当事者にとって、ライフステージにおける施設入所や退所という経験は、極めて精神的にも身体的にも負荷のかかる出来事、すなわち、ライフ・イベントとしてとらえることもできよう。施設入所に関しては、子どもという時期に、親などの家族からの分離と、家庭や地域という生活の場、生活環境における分離を「余儀なく」経験する。しかもそこには、「入所措置の理由」となる生活上の困難や課題がある。また、施設において生活を営み、ケアや支援を受け、施設職員や友人、学校などの新たな社会関係を形成した後に措置解除となり、施設を退所して家庭復帰や地域でのひとり暮らしなど、生活の拠点となる場と社会関係において、再び新たな出発をすることになる。そこには

就職や進学を選択と決定をする時期と重なることもある。このように、施設への入所や退所というライフ・イベントでは、当事者にとって、様々な不安や葛藤、困難等のストレスのかかる複合的な経験を行うことが考えられ、そこには、帰属する場と、家族関係や社会関係に関する変容——社会関係の形成や再構築、疎外・排除など——を伴う(青少年福祉センター編1989;西田編2011;谷口2011ほか)⁽⁵⁾。

こうしたことをふまえ、本稿を含む研究全体の視座は、当事者への生活史聞き取り調査を通して、誕生以降の生活の営みのなかで、どのような出来事に直面したのか、それをどのように受けとめ、対処してきたのか、どのようなところから力を得てきたのか、ふりかえった現在はどのようにとらえているのかという過程を、生活基盤と環境、家族関係、家族以外の施設ケアを含む社会関係との関わりのなかで明らかにすることにある。具体的には、生活を、時間軸において、施設入所に至るまでの経緯、施設入所中、退所に向けての経緯、退所後の生活という時間的経過、すなわち生活史において理解し、支援の過程における課題を考察する。

そのなかで、本稿では特に、施設退所後に家庭復帰をした人々に焦点を絞り、検討する。取り上げる生活史聞き取り調査の協力者は10人である。得られた結果と考察、結論に関する一般化、普遍化には課題が残るが、一人ひとりの個別性を重視し、ニーズに即した支援について手がかりを得る探索的な研究として位置づけ、今後につなげたい。

2. 用語の整理

用語について、ここでは、「家庭復帰」、「社会関係」、「生活史」の整理をしておく。

まず、「家庭復帰」は、社会的養護における施設を退所して家庭(親などの保護者がいる家庭、生育家庭)に戻ることを、すなわち家族(定位家族)と同居することとし、その意味で「家庭引き取り」と同義とする。「家族再統合」、「家族(関係)の再構築」、「家族機能の再生」等については、家族との同居を意味することもあれば、より広義に、同居か否かに限らず家族機能や家族関係のあり方を示す場合もあることから、区別して用いる(才村2005:271-273)⁽⁶⁾。ただし、後述する先行研究等のなかで、著者が「家族再統合」等の概念を用いている場合には、そこで用いられている意味に留意しつつ活かした。

次に、「社会関係」は、家族を含めて用いられることもあるが、本研究の目的から、便宜上、家族とそれ以外の人間関係や社会資源とを分けてとらえ、前者を家族関係、後者を社会関係とする。社会関係には、フォーマルとインフォーマルの双方を含む。

「生活史」については、類似または関連する用語として、「ライフストーリー」、「ライフヒストリー」、「ナラティブ」、「口述史」などがある。ここでは、当事者の「語り」による生活の歴史、生きてきた歩みや過程を「生活史」としてとらえている。その意味ではライフストーリーであるが、時間軸を重視し、当事者の「語り」が証言としての性格をもつという点において歴史性、社会性があり、ライフヒストリー的な側面もある。また、調査方法としては、生活史に

関する“語り”を聞くという点でナラティブ・アプローチを参考にしている。それぞれの概念の特徴をふまえ、本稿では「生活史」と表記した⁽⁷⁾。

Ⅱ．研究の背景と先行研究の検討

1. 子どもの生と生活、おかれている状況と社会

研究の背景として、社会的養護を受けている子どもの生活とおかれている状況、背景について、先行研究及び厚生労働省調査から概観しておきたい。先行研究では、社会的養護を必要とする子どもや、児童養護施設等に入所する子どもの生活と家族背景、社会的背景について、次のようなことが指摘されている。

(1) 子どもとその家庭の貧困、生活困難・生活課題の重層性と複合化

周知のように、子どもの貧困への社会的関心が高まっているが、子どもへの虐待と貧困との関係、子ども・若者の社会的不利と困難、貧困の連鎖と世代間に渡る課題の深刻化等が指摘されている（松本編 2010；浅井・松本・湯澤編 2008；阿部 2008；山野 2008）。

また、生活困難や課題の複合化について、例えば、松本他は、2003 年度に北海道内の全児童相談所において虐待相談受理をしたもののうち、受理時年齢が 10 歳、14 歳、15 歳の児童票 129 例から 119 例を分析対象とした調査を行った。その結果、「経済的困窮、家族変動、夫婦間暴力、子どもの障害、養育者の疾病と障害、社会的孤立が重なり合い、複合的な不利が形成される中で、子育ての困難が子ども虐待問題として表面化すると仮説的に考えられる」という結論を得ている（松本他 2010）。

(2) 施設入所理由にみる保護者の状況、家族関係

次に、厚生労働省が 1952 年以降、約 5 年毎に実施している「児童養護施設入所児童等調査」についてである。そのなかに、児童養護施設への入所理由を「養護問題発生理由」として集計した結果がある（選択肢を一つ選んで回答）。この 50 年余りの推移をみると、「父または母の死亡」が一貫して低下傾向にあり、2008 年には 2.4% である。1970 年代から 80 年代にかけて「父または母の行方不明」や「父母の離婚」、「父または母の入院」の割合が、それぞれ他の年代の割合よりも高めに推移し 80 年代以降は低くなっていること、「父または母の精神疾患」、「父または母の放任・怠だ」、「父または母の虐待・酷使」の割合が高くなってきていることがわかる。また、2008 年の調査では、「父または母の放任・怠だ」（13.8%）、「父または母の虐待・酷使」（14.4%）、「棄児」（0.5%）、「養育拒否」（4.4%）と、いわゆる虐待・ネグレクトに関する理由が、合わせて 33.1% となっている。さらに 2008 年の調査では、初めて、入所児童の被虐待経験の有無と虐待の種類に関する調査項目がある（複数回答）。そこでは、児童養護

施設に入所した子どものうち、半数を超える者が虐待を受けた経験があり (53.4%), その中でネグレクトが 66.2% を占め、次いで身体的虐待 (39.8%), 心理的虐待 (20.4%), 性的虐待 (3.9%) の順という結果であった⁽⁸⁾。

このように、調査結果からは、虐待やネグレクト等、家族関係のあり方に関する課題が入所背景にあることが読みとれる。

(3) 社会的排除, 社会的不利, 社会的な差別・偏見

西田他は、12 人の児童養護施設経験者に「生活史インタビュー」を行い、「生まれ育った家庭のあり方, 学校教育経験, 施設での生活と施設を出た後の仕事や暮らしについて, 経験者本人に語ってもらい聞き取る作業」を通して、先行調査研究の知見も加味しつつ、課題を考察している。西田は、生活史に関する本人の「語りを通して描かれるのは、生まれ育つ家庭, 学校, 施設での暮らしとその後の生活に、幾重にも折り重なる困難と不利な条件があり、それに追い打ちをかけるように偏見や差別の目も向けられる、そうした経験である」と述べている (西田 2011: 4-8)。また、共同研究者の一人である妻木は、調査対象となった当事者の家族について、「経済的困難・貧困や家族構成の不安定・不定形さ、親の疾病や障害、さらには虐待としても表れることになる家族関係における困難さ——これら重層的な困難を抱え持った家族」と述べ、子どもの入所に至る過程は、「そうしたさまざまな困難や不利のそれぞれが原因となり結果となりながら、分かちがたく絡み合い蓄積されていく過程」と指摘する。さらに、生育家族にみられる困難さや不利が施設入所後にも継続あるいは深刻化するなかで、調査対象者が入所することとなった児童養護施設は、「不利の継続と不利の連鎖を断ち切る、あるいは弱めるという機能を果たすことができたのであろうか」という問いを発している (妻木 2011: 38-39)。

社会的排除に関して、谷口は、児童養護施設におけるフィールドワークとインタビュー調査等を通して、「貧困や虐待をはじめ社会的に排除された状態にある子どもたちについて、児童養護施設への入所や施設での生活および退所を通した生活過程を分析」し、「排除への対抗軸として包摂ではなく、社会との関係性を意識しながらも個人レベルにおける対抗軸を設定し『脱出』概念として整理し、児童養護施設における子どもと援助者の生活、社会との関係を通した脱出に向かう過程と課題を実証的に明らかにして」いる。そして、「子どもたちが脱出できない主因を「援助していく体制の課題、生活している基盤である施設自体のもつ課題、ひいては社会全体の課題として還元される」とする (谷口 2011: 14, 233-241)。

さらに、田中は、教育社会学の立場から、「『家族崩壊を経験した子ども』と社会的に認知された経験をもつ子どもの主観的側面から彼らの社会化過程の側面を明らかにする」ことを目的とし、児童養護施設における参与観察と職員や子どもへのインタビュー調査を通して、「子どもの主観的側面から」スティグマの問題を分析し、「スティグマを負う者としてのパースペクティブと普通の人としてのパースペクティブ」の双方をもつという、2つの生活世界、「ダブ

ル・ライフの問題」を提起する（田中 2004：8-11, 155-169）。

上述の先行研究からは、施設入所に至る子どもと家族のおかれている状況や背景には、貧困・経済的な困難をはじめ様々な生活困難や課題の複合化・重層化、社会的な不利・排除・孤立、それらと関わる偏見・差別等の社会関係に関する課題、虐待やネグレクトなど家族関係や家族機能に関する課題などが明らかにされ、これらが密接な重なりをもっていることが指摘された。様々な困難・課題が蓄積され、世代的累積・連鎖のなかで、一層困難や課題が深刻になるという悪循環、課題を放置してきた私たち社会の側の責任の問題、そうした中で、子どもも家族も世代間に渡ってぎりぎりの状況におかれて生きてきた時間的な連続性が読み取れる。社会的公正や社会連帯の視点からも、改めて問うべき課題であろう。

こうしたなかで、施設の役割・機能についても、「家庭代替」・「保護」・「養育」だけではなく、「養育・保護」を基盤に、「自立支援」を目標とした、治療・教育・家族援助・地域支援などの多機能化と専門性が求められている（伊藤 2012）。

2. 社会的養護における支援に関して

(1) 施策の動向

施策的には、1997 年の児童福祉法改正において児童養護施設等の目的に「自立支援」が据えられ、自立支援計画の策定が義務づけられたこと、また 2004 年には、入所理由となった生活課題や家庭上の養育問題の解決を図り、家庭復帰の促進等を目指す家庭支援専門相談員（ファミリーソーシャルワーカー）が配置されたこと⁽⁹⁾、さらに、2011 年の「児童養護施設等の社会的養護の課題に関する検討委員会・社会保障審議会児童部会社会的養護専門委員会」がとりまとめた「社会的養護の課題と将来像」と、それに基づく児童養護施設等の「施設運営指針」の作成、「自己評価」の推進、「第三者評価」の義務化において、子どもの権利擁護を中核とし、入所中からの親子間の関係調整や回復支援、家族・家庭支援、退所者支援が位置づけられた。

子ども/当事者の生と生活への支援において、家庭や施設、地域を含む生活基盤への支援、家族関係や社会関係に関する支援等が、近年、施策の課題としてより明確に位置づいてきたのである。まさに、子どもの権利条約の柱でもある、「子どもの最善の利益」のために、生きる・育つ・まもられる・社会に参加する権利の擁護と生活支援の具体化が求められている。

(2) 施設退所後の支援、アフターケア

退所後の支援やアフターケアに関する先行研究のなかで、近年は、退所直後における生活の安定が目標とされるにとどまらず、その後の支援継続の必要性が指摘されている。例えば、相澤（2008）は、財源の問題はあるとしつつも、現在の資源を統合、有効活用して「相談機能、

生活支援機能, 就労支援機能, 経済的支援機能, コーディネート機能などをもった総合的な青少年 (15~30 歳程度) の自立を支援する『青少年自立サポートセンター (仮称)』の設置等, 青少年への支援を提起している。また, 伊藤 (2011) は児童養護施設へのアンケート調査結果をふまえ, 児童相談所等他機関との連携, アフターケア専門職の増員と活動費用の保障, 退所後の生活を支える地域資源の充実, 施設体制の整備等を課題としてあげている。

さらに, 東京都福祉保健局が実施した児童養護施設等退所者へのアンケート調査の結果からは, 雇用形態の不安定な状況や経済的な問題, 学業 (最終学歴) に関する不利, 困った時の相談先, 孤独感や孤立感, 職場等の人間関係, 家族関係に関する困難等が明らかにされた。退所直後に困った時の相談先については, 「施設職員」(40.0%), 「施設長」(14.6%) という施設関係者が合わせて5割を超えており, 退所者にとって, それまでの社会的養護の施設とのつながりが退所後も継続して求められている状況がわかる。調査結果からは, 子どもの「自立生活能力を高めるための養育」, 「進学への支援と卒業までの支援」, 「退所した後のフォロー」等について社会全体で取り組んで行く必要性を指摘している (東京都福祉保健局 2011)。同様に, NPO 法人ふたばふらっとホームが実施した施設退所者や里親委託を離れた者を対象とする調査結果からも, 退所後の主なリスクとして「無条件で頼れる人がいない (保証人がいない。即ち親族等との関係が良くない)」, 「学歴のハンデ」, 「コミュニケーションがうまく図れない」があり, 課題として, 一つ目に「退所後も施設や里親が受け入れる場所として多くの出身者が望んで」おり, そのための場所と人員, 財源, 二つ目に施設以外の居場所づくりへの支援 (当事者団体等), 三つ目に退所者支援としての専門的な相談事業や施設の活用等を指摘する (NPO 法人ふたばふらっとホーム 2012)。これらの調査結果は, 調査実施者が断りをいれているように, 調査方法において, 回答者が施設や里親, 養育家庭と連絡が取れる状態にあることから, 必ずしも社会的養護を離れた者の全体像を表しているとはいえない。しかしながら, 退所後において, 家族や親族などに頼ることができず, 施設等のそれまでの社会的養護の場や職員とのつながり, 居場所的なつながり, 専門的な相談や支援を受けられる場等の必要性が, 当事者の声として求められている点をふまえると, 検討すべき極めて重要な課題である。

(3) 保護者・家族への支援, ファミリーソーシャルワーク

虐待やネグレクトに関する課題, 家族関係の調整や再構築に向けての支援等が課題になり, 家庭支援専門相談員も導入されるなかで, 近年はファミリーソーシャルワークや家族関係の調整, 再構築に関する先行研究が蓄積されてきている。そのなかで, 村井は, 「児童養護施設の家族を援助する際の基本的視点と方法」として, 次の四点をあげている。一つ目は, 「『児童養護施設入所児童の親』は, 社会的に作り出される」という視点, 二つ目は, 「援助方法として, 彼らのもっている社会機関への不信感を排除することに力を注ぐという援助を優先する」ことが重要であり, その「不信感を取り除くため」に, 「①こちらから積極的に向かい合い, ②

支持的な対応をする，③ 彼らの代弁者としての役割を果たす，④ 効果が目に見える具体的な援助を行う，ことによって，彼らに信頼される存在となる必要がある」とする。三つ目は，「保護者家族のもつ『力』（健康的側面）を理解するという視点」，四つ目は，「彼らの援助のためのサポート・ネットワークを形成する必要」である。そのフォーマルネットワーク，インフォーマルネットワークにおいて期待されることは，「① 情報の相互伝達，② 共通の援助計画の形成，③ ネットワーク内の役割分担，による援助の実施」であるという（村井 2007）。村井の指摘は，親を，“子どもの親”としてとらえるだけではなく，“一人の人間”としてその尊厳を大切に，支えることを前提とした視点であり，示唆に富む。また，関連して年代的には少し遡るが，津崎は，「養護児童に対するソーシャルワーク課題」を，(1)「家族へのケースワーク」として，「父母のパーソナリティ強化のための援助」・「家族関係の調整と修復」，(2)「社会資源の活用」として，「不安定な家族を支えるための諸資源の活用」・「短期養護ニーズの補填」，(3)「児童への援助」として，「適切な保護とケア」・「心的外傷回復のための治療的かわり」・「家庭復帰への調整と自立に向けての援助」，と提起する（津崎 1987）。

このほか，支援方法やアプローチについて，近年は，支援プログラムの開発を含めた研究が蓄積されてきている。例えば，施設における「家族再統合」（ここでは家族機能の再生・回復と定義）に向けた実践モデルと実践マニュアルの開発（野口 2008），児童相談所における保護者参加型支援モデルの開発（鈴木 2007），「当事者（家族）参画モデル」によるファミリーグループ・カンファレンスの可能性に関する研究（林 2008），ファミリーソーシャルワークの役割や機能，専門性に関する研究（中山 2008），児童養護施設におけるケース管理と支援の計画化，アセスメントに関する研究（北川 2010）等である。

これらの研究からは，保護者・家族の主体性やストレング스에 着目したケア・支援，信頼関係の形成・修復と支持的なアプローチ，家族システムへの働きかけや支援における多職種との連携，アセスメント，マネジメント等が検討され，社会的養護において子どもと家族を支援するためのモデルが提示されるなど，より豊かな実践に向けた研究がなされてきている。

以上，本研究の背景について，施策や先行研究から概観してきた。子ども/当事者に対しても，保護者，家族に対しても，其々，個々の主体性やストレングスを支えること，また，親子間や家族関係のパターンの変容と再構築への支援，社会関係の形成や再構築に向けての支援が求められていることが明らかになった。そこには，社会的養護を受けた当事者自身を対象とした調査や研究等から得られた知見もある。こうした当事者研究の重要性と関わって，実際に家庭に戻った子ども/当事者にとって，その生活がいかなるものであったのかについては，社会的養護における措置解除と家庭復帰という選択の評価を含め，検討の余地が残されている。

そこで，本稿では，実際に，家庭復帰をした当事者の生活史を聞くという方法において，その“語り”から，生活の状況と過程，社会的養護における支援の過程，家族関係や社会関係に

関して、当事者一人ひとりの個別性においてその主観的事実と意味に着目し、課題を考察する。

Ⅲ. 研究の視点と方法

1. 調査方法・対象

本研究における調査方法は、生活史を聞くというインタビュー法で、自由度の高い半構造化（半構成化）インタビューによる。主な質問項目の柱は、「これまでの生活における大きな出来事と対処、家族関係・社会関係について」、「現在の生活と将来について」、「児童養護施設等での生活、受けたケアについて（入所に至る経緯、入所中のこと、退所に至る経緯、退所後の施設との関わり等）」、「家族、家庭について」、「現在、社会的養護を受けている子どもたちに伝えたいこと」、「生きていくうえで大切だと思うこと」、「社会的養護、社会福祉に関して思うこと・意見」等である。

実際のインタビュー過程では、家族関係・社会関係に着目しつつ、生活史全体に関して、調査協力者が思い出すままの自由な“語り”を最大限尊重し、聞き取るという方法で実施した。インタビューの流れは、導入において、現在のことや近況などを聞くことから始め、過去から現在（誕生からこれまで）という時系列に沿って実施したが、調査協力者の語りやすい順番や過程を活かし、尊重した。

対象となる調査協力者の選定は、研究の趣旨を施設等に説明し、協力により紹介を得た⁽¹⁰⁾。調査期間は2007～2010年度で、インタビューの回数は、一人あたり1～5回、時間数は一人平均約4時間であった。インタビュー回数が調査協力者によって異なる理由は、インタビューの日程調整等条件的な制約により1回のみ協力を得られた場合や、時間的な制約のため1回で終結できず継続を依頼して調査協力者から承諾を得た場合、または調査協力者よりインタビュー継続の要望を受けた場合等がある。インタビュー時間は、調査協力者の都合や心理的・身体的負担等を考慮の上、1回につき90分から最大2時間を目途として実施した。インタビュー内容は、調査協力者の了解・承諾を得て録音し、逐語録を作成した。

分析対象となる調査協力者の基本属性は、表1の通りである。かつて社会的養護を受けた経験があり、家庭復帰経験のある10人で、男性3人、女性7人、平均年齢は25.6歳であった。10人中、家庭復帰後に施設への再措置があった人は6人である（A, B, C, D, F, G）。家庭復帰後の再措置が無かった人は4人（E, H, I, J）である。インタビュー調査時現在、親等の保護者と同居している人は無く（0人）、10人全てが別居していた。現在の同居者や家族構成については、未婚・単身・独居が3人（A, B, H）、既婚・夫や子どもとの同居が6人（D, E, F, G, I, J）、婚約・婚約者との同居が1人（C）であった。

表 1 調査協力者の基本属性

ID	年齢	性別	学歴	家庭復帰後の再措置。 () 内は再措置後施設	就労（収入源、家計）	居住形態	婚姻	家族構成 (同居)	退所/退居 後から現在 迄の年数
A	10代	男性	中学卒業、 高校中退	有（自立援助ホーム）	無職、求職中 (貯金、親の仕送り、 友人から支援等)	賃貸	未婚	単身・独居	1年以内
B	20代	女性	中学卒業	有（自立援助ホーム）	無職、求職中 (母親の仕送り等)	賃貸	未婚	単身・独居	約1年
C	20代	女性	高校卒業	有（シェルター、自立援助ホーム）	正規	賃貸	婚約	パートナー	約2年
D	20代	女性	短大卒業	有（児童養護施設）	非正規（共働き）	賃貸	既婚	夫、 子ども2人	約4年
E	20代	女性	中学卒業、 高校中退	無	無職（夫の扶養）	賃貸	既婚	夫、 子ども3人	約12年
F	20代	女性	中学卒業、 高校中退	有（児童自立支援施設）	非正規（共働き）	賃貸	既婚	夫、 子ども2人	約14年
G	20代	女性	大学卒業	有（児童養護施設）	正規（共働き）	賃貸	既婚	夫、妊娠中	約8年
H	20代	男性	大学卒業	無（乳児院、児童養護施設）	正規	賃貸	未婚	単身・独居	約12年
I	30代	女性	高卒後、 専門学校卒業	無	正規	賃貸	既婚	夫	約15年
J	30代	男性	高校卒業 (定時制)	無	正規（共働き）	賃貸	既婚	妻、 子ども2人	約19年

注1) 記載内容は、すべてインタビュー調査実施現在（2007～2010年度のインタビュー調査時）におけるデータによる。

注2) 「家庭復帰後の再措置」は、家庭から措置入所し家庭復帰した後に、施設への再措置/入居の状況を示す。

注3) 児童養護施設等への措置は「入所」、「退所」、自立援助ホームでは「入居」、「退居」を用いている。自立援助ホームが措置事業に転換されたのは2009年度からであるが、本稿では特に支障が無い限り、2009年度以前についても社会的養護における措置施設の中に組み込んで記述した。

注4) 「退所/退居後から現在迄の年数」は、再措置の場合、最後に利用した社会的養護における施設から退所/退居後、インタビュー調査実施現在迄の年数を示す。

2. 分析の視点

施設退所後に家庭復帰した人々への社会的養護における生活と自立に向けての支援に関する課題を検討することを目的として、生活の全体性を生活史という時間軸においてとらえるという観点にたち、当事者の生活と、家族関係、社会関係に着目して分析を行う。

具体的には、図1に示したように、出生から現在（インタビュー調査時）までの調査協力者の生活の過程と、社会的養護における支援の過程を据えた。具体的には、時間軸において、「出生～施設入所前」、「施設入所中」、「施設退所・家庭復帰～現在」と大きく3つに時期区分した。また、施設入所前の生活に関しては、入所の経緯/きっかけ（図1の②）、施設入所中の生活に関しては、退所・家庭復帰までの経緯/きっかけ（図1の⑤）という生活の場や家族関係・社会関係の移行期を取り上げた。さらに、施設入所中における家族関係、社会関係については、保護者等の家族と分離した生活にあることから、施設での生活、社会関係（図1の③）と、家族・家庭との関係（図1の④）を分けて表記した。

なお、図1、表2において表記する施設入所とは、調査協力者の最初の社会的養護の利用と

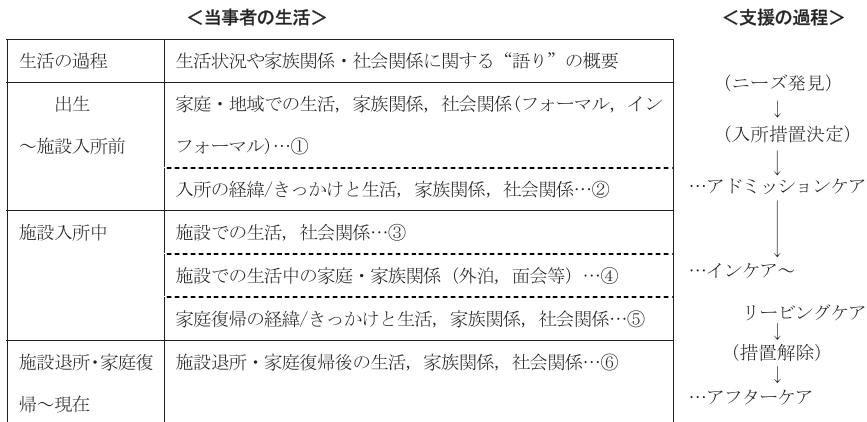


図1 分析の視点

しての施設入所を示す。上述のように、家庭復帰後に再措置となり施設へ入所した経験のある人が6人いるが、家庭復帰後の再措置に関しては、全て図1の⑥に記述した。調査協力者の生活の場や、受けてきた社会的養護の内容とその過程は、個別的かつ多様である。具体的には、調査結果において述べる。

3. 分析の手続き

データ分析の手順と概要は以下の通りである。第一段階では、インタビュー調査の結果として得られたデータ(音声データ、一次資料)について、逐語録を作成した(文字データ、二次資料)。

第二段階では、作成した逐語録を、生活史という時間軸の観点から年表に起こす作業を行った。年表の縦軸には、時間軸を据え、年齢・学齢期または発達段階(幼少期・小学校期・中学校期・義務教育終了以降)と図1の枠組における区分(“出生～施設入所前”等)を記した。その時間軸に対応し、調査協力者の“語り”から、生活状況、家族関係、社会関係に関わる主な出来事と、その出来事を当時どのようにとらえていたのか、また現在はどのようにとらえているのか、語られた出来事の“意味”に関する内容を抽出した。年表作成に際して、二次資料からの文字データ抽出にあたっては、インタビュー内容の全体の文脈や、調査協力者が“語り”の中で特に強調された出来事とそれにまつわる思い、繰り返し語られた語彙や内容を吟味している。同時に、そのデータの抽出は、先行研究をふまえて本研究で必要と考える内容に留意し検討している。

第三段階として、作成した年表をもとに、調査協力者の“語り”による個別の事例をその内側から理解するよう努め、意味のまとまりに沿って要約、再構成した。その際、個人が特定されないよう倫理面での配慮に留意し、方言や固有名詞、地域性等の情報を修正している。本稿

では、この段階の作業結果の概要を述べる。第一段階、第二段階のデータは膨大な量であるが、第三段階では、調査結果全体の概要と特徴をつかむためにデータを収斂している。こうした作業では、研究者の視点の偏りや恣意性が懸念されることから、データの妥当性・信憑性をより担保するために、予め調査協力者本人の確認を得ておくことが望ましい。本稿では、表1、表2、調査結果と考察に関する内容を、調査協力者本人またはその代理人（インタビュー契約の際に調査協力者の了解を得ることができた、紹介者の施設長等）に説明し、確認を得た。

なお、言うまでもなく、インタビューによって得られたデータは、調査協力者（語り手/インタビューイ）と、研究者（聞き手/インタビュアー）における相互作用や関係性⁽¹¹⁾、インタビュー時の周囲の環境、調査協力者の語る力、研究者の聞く力、双方の心身の健康状態等を反映している。語られた内容は、「今、ここで」のものであり、調査協力者にとっての主観的事実と感情、意味をもつ。語られていない内容があることも当然ふまえる必要がある。

このような手続きでは、調査方法と分析方法、分析結果において、妥当性や信憑性に関する課題も生じる。しかしながら可能な限り、調査協力者一人ひとりとその“語り”に寄り添い、分析と考察を行う。

4. 倫理的配慮

本研究は、「日本社会福祉学会研究倫理指針」、「佛教大学研究倫理指針」を厳守し実施した。調査方法の性格上、特に調査協力者の人権と安全を最優先するよう努めた。紹介先である施設等及び調査協力者本人とは、其々、文書による契約を結び、研究倫理の遵守等を説明の上、同意・承諾を得ている。契約の文書は、双方にて署名後、保管することとした。

また、調査協力者には、インタビューの際に話したくないことについては話さなくて構わないこと、望んだ場合にいつでもインタビューを中止できること、筆者の発言や質問等で不快と感じたり苦痛に思ったりした時には、率直に指摘してほしい旨を伝えた。調査時の記録は、調査協力者の同意・承諾を得てフィールドノーツ（メモ）による記録と録音を行った。録音は了解を得た場合に実施した。実際のインタビューでは、1人はフィールドノーツのみにて、それ以外の9人からは録音の了解を得た。録音内容の逐語化は全て筆者が行った。結果の公表は、守秘義務に留意し、本人が特定されないよう十分配慮するものである。

本来、テープ起こし後に、調査協力者にその内容（逐語化した文字データ）の確認を得るべきであるが、調査協力者との調整の結果、改めてその機会を得ることが困難だったため、次のような工夫と配慮を行った。その一つは、インタビューが複数回になる場合には前回のインタビュー内容を要約する形で調査協力者に伝え、一貫性に努めるとともに、誤りがあったり修正の要望がある場合にはそれに応じている。二つ目は、各回のインタビューの最後、または途中で（意味のまとまりのあるところで）、適宜リフレインを行った。その際、調査協力者の心理的負担が無いよう配慮を心がけ、語りの流れを遮らないよう留意するとともに、“語られた”

内容を正確に理解するように努めた。三つ目は、分析に際して、調査協力者に関する個人情報
が特定されないよう、細心の注意を払う。その他、調査結果については、前述の「3. 分析の
手続き」に記したような配慮を行った。

IV. 結果と考察

図1の視点に即して、生活史に関するインタビューを行った結果、調査協力者10人の“語
り”より導かれた内容を表2にまとめた。その全体像から得た知見は、以下の通りである。

1. 施設入所前の生活状況、家族関係・社会関係

〈施設入所前の生活と家族関係・社会関係……①〉

施設入所前の生活では、幼少期から、貧困や低所得、親の心身の病気、過度の飲酒やアル
コール依存、親同士の関係性における課題（離婚や離別、家出、不和、DV等）、被虐待・ネ
グレクト、通学困難、衣食住に関する基本的な生活が充足できない等の状況におかれていた。
親子関係において、被虐待やネグレクト等の状況にあったと示唆されるのは、A, B, C, D, G,
Iの6人である。そこには、親の離婚や家出、親の死等をきっかけに、直接暴力を受けるよう
になったり、被虐待やネグレクトの深刻化、衣食住等の生活環境が安心・安全ではない、学校
にも行けなくなる等の状況が読みとれる。親や家庭の生活困難な状況がそのまま子どもの社会
関係のあり方にも反映し、学校に行けなくなる、いじめを受ける等、社会関係の阻害や剥奪に
つながっている。また、直接親から身体的な暴力を受けてはいないものの、DVやきょうだい
への暴力を目の当たりにして不安や心配を抱えていたのはC, Dであり、やはりネグレクトの
環境におかれている。

被虐待やネグレクトに関する語りがみられなかった4人は、幼少期に親の離婚があったE,
F, Jと、出生直後に母が病死したHであり、ひとり親家庭となって施設入所に至るという経
緯が読み取れる。

〈施設入所のきっかけ/経緯……②〉

最初の施設入所時の年齢は様々であるが、前述のように、親の死や離婚によりひとり親家庭
（すべて父子家庭）となったことを機とした入所がE, F, H, Jでいずれも幼少期であった。そ
の“語り”からは、父親が施設に自分を預けたことを、「あまり覚えていない」、「育てられな
かったと思う」、「しょうがなかったと思う」と受けとめている。

次に、被虐待やネグレクトの環境におかれていた6人では、Iのみ、自ら入所を希望してい
た。I（当時14歳頃）は中学校の先生から「あなたの意思があれば施設に入ることもできる」
という助言があり、栄養失調になった妹の心配や、自身についても「もう限界」と感じていた

という。Aは、非行等で「問題児だったから」（当時12歳頃）、Bは「家出してきょうだい宅に行ったけれど、そこにもいられなくなって」（当時15歳頃）、Cは「いいところに連れて行ってあげる、とお母さんから言われて遊園地のようなところかなと思った」（当時9歳頃）、Dは「学校の先生に、今日は家に帰ったらダメと言われて、そのままきょうだいと兄相に行った。少しびっくりしたけれど、お母さんが大変だったし、きょうだいも一緒だったので、うすうすどうということかわかった」（当時11歳頃）、Gは、「母親に連れられて（母子生活支援施設へ入所）」（当時8歳頃）である。Gはまた、「自分は施設を利用したというわけではない。自ら望んで利用するという利用者ではない」とも語っているが、こうした調査協力者の“語り”からは、子どもにとって施設入所とは「余儀なく」、「（他に選択肢がなく）しかたなく」、あるいは「自分に問題があったから」、「自分が悪かったから」という認識と気持ちを伴っていることがわかる。

したがって、入所時やインケアの初期、すなわちアドミッションケアにおいては、親等の家族との分離や生活環境が変わることへの不安等への丁寧なケアとともに、子ども自身が自分を否定したり自分に問題があると思っている認識を、「そうではない」と明確に伝え、子どもの生と尊厳を大切にしたい援助コミュニケーションと支援が大切であろう。年齢や発達に応じて、子どもが入所の経緯や背景を理解できるような支援、入所中の家族関係のあり方に見通しをもてるような支援も考慮すべきである。

2. 施設入所中の生活と家族関係・社会関係

〈施設入所中の生活、社会関係……③〉

施設入所後は、「最初は不安だったけれど、だんだん慣れてきた」、「安全だとわかった」、「安心した」、「ほっとした」、「リラックスできた」、「平和な生活だった」、「やっと人並みの生活になった」、「ご飯も食べられて、お風呂にも入ることができた」、「学校にも通えるようになった」、「勉強ができるようになった」、「友達ができた」、「部活やクラブが楽しかった」、「施設の先生に甘えることができた」、「施設は育ててくれたところ」等が語られ、衣食住等に関する基本的な生活基盤の充足と、安心・安全な生活を体感し、学校に通い、勉強や部活を楽しみ、先生や友人等、人間関係にも広がりが出てきていることがわかる（A, C, D, E, H, I, J）。インケアでは、安心・安全・休息といった生活環境が保障され、「私」という主体が尊重され育てられていくこと、愛情や信頼のあるコミュニケーションが重要であると改めて確認できる。

一方、上述のような“語り”がみられなかったのが、B, Gであった。Bは自立援助ホームや職場で人間関係のトラブル等があり、2ヶ月後には退所、Gは「学校には行けるようになった。施設（母子生活支援施設）では母の愚痴の聞き役だった。人に甘えたり求めたりすることが自分からはできなくて、苦手だったと思う」とふりかえっている。Gは、「職員は愛情を与えてくれようとしていたのかもしれない。けれど、自分がそのアンテナをもっていなくて、

キャッチできなかったのかもしれない」とも語る。Cは、施設での生活について、「施設も良かったけれど、家に帰りたいという気持ちの方が強かった。ワルをしていて、施設でも学校でもうまいかなくて暴れていた」と話す。子どもの年齢や背景をふまえ、一人ひとりのおかれている状況や発達に即した「基本的信頼感」と「自尊感情」をどのように育んでいくか、インケアでは極めて重要な課題であることを教えられる。さらに検討が必要である。

〈施設入所中の家族、家庭との関わり……④〉

施設入所中に、親との面会や家庭への外泊等があったのは、A, C, E, F, H, I, Jである。

Aは家に帰っても自分の居場所が無いと感じ、祖父母宅に行っていた。C, E, F, H, Jは、其々時期は異なるが「家に帰りたい」という願いがあり、面会や外泊を自らも望んでいた。Iは、中学卒業後の進路決定の時期に父との面会で、「競艇の選手になれば稼げるぞ、と言われて。父がお金を当てにしているとわかって嫌だった」と語っている。

親等との関わりについて、Bは家出先のきょうだいとのつながりがあり、Dは母親から電話や面会、外泊の希望があったが「会いたくなくて」断っていた。Dは、当時、施設職員が自分の気持ちを尊重し「支えてくれていた、守ってくれていた」ことに感謝している。Gは父から教えてもらった連絡先に「電話をかけてみたことがあったけれど、出る前に切ってしまったことがあった」と語る。

〈施設退所、家庭復帰のきっかけ/経緯……⑤〉

施設退所後、家庭復帰となったきっかけ/経緯について、「自分から家に帰ることを希望」したのは、C, E, F, H, I, Jの6人で、入所中から面会や外泊をしていた。その中でIは、高3頃に行方不明となっていた母から施設に連絡があり、「一緒に住みたい」と告げられる。施設では、「まず、施設職員と母親が会って、本当に大丈夫かとか、話をして。それから、母親と施設職員と私を交えて3人で話し合いを何度かして、帰りたいと思った」と語り、「久しぶりに母親が現れてびっくりしたけれど、先に職員と母が話し合って、それから自分が入るというふうに進めてくれて。職員が考えてくれていたのだと思う」と語っている。

Bは自立援助ホームでの生活や仕事がうまくいかない中で、「ホームを飛び出して」きょうだいの家に戻った。A, D, Gは自らの希望や意思とは、ある意味無関係に家庭復帰となっている。その状況について、Aは「施設長が決めたと思う」、「自分はそのまま施設にいてもいいと思ったけれど、褒められることが多くなって（自分の）問題が無くなったからだと思う」、Dは「帰りたくなかったけれど、母親が“お酒をやめてご飯もつくるし、家もきれいにして、ちゃんとする”と約束してくれたので」、母子生活支援施設に入所していたGは「母親が他の利用者とトラブルを起こしたから出て行かなくてはいけなくなったのだと思う」と語る。

このように、インタビューでは、退所後の家庭復帰について、自らそれを望んでいたり、そ

の経緯を説明できた人もいたが、何故そうになったかがわからなかったり、自身の本意ではなかった人もいることがわかる。インケアからリビングケアでは、退所や家庭復帰が他人ごとではなく、自身のこととして整理し見通しをもてるきめ細かな支援が求められる。

3. 施設退所後の生活、家族関係・社会関係

〈施設退所後の生活と家族関係、社会関係……⑥〉

家庭から施設に入所し、家庭復帰後に再措置として施設入所していたのは、A、B、C、D、F、Gの6人である。また、家庭復帰後の再措置が無かった人はE、H、I、Jの4人であり、退所後は独居している。また、再措置となった6人も全て退所後には独居である。

家庭復帰をした6人についてさらにみていく。Aは、家庭に戻った後も入所前と同様、親に「否定される」、「信用できない」ことがあり、喧嘩や万引き、家出等が繰り返され、自立援助ホームに入居、家庭復帰、自立援助ホーム入居、家庭復帰、自立援助ホーム入居、独居という経緯を辿っている。「正直、親に頼りたいし、親も心配してくれているのかなというのはあるけれど、ある程度距離をおいて生活している今がいい」と語る。

Bは、自立援助ホームを飛び出した後、きょうだい宅に戻るが「そこにもいられなくなって」再度、自立援助ホームへ入居、その間に母親が地域で生活していることがわかり、母親のところに戻る。しかし、「そこを出たくなって」自立援助ホームに戻ることを希望して入居、退居後は母親から仕送り等を受けながらひとり暮らしをしている。

Cは、施設退所後、「期待していた生活が裏切られ」、母親からの暴力がひどくなり、通学、通勤も困難になっていくという生活の3年を経てようやく保護され、シェルターから自立援助ホームへ入居、生活を立て直し、ひとり暮らしの後、現在はパートナーとの結婚を予定している。「親には住所を知らせず、連絡もとっていない。距離をおきたい」と語る。

Dは、「ちゃんと生活する」と約束した母親に「裏切られ」、当時入所していたきょうだいを通して、再度施設入所の希望があることを伝えて、施設から高校、短大へ進学し、退所後はひとり暮らしを経て結婚、現在は夫婦と子ども2人の生活である。「母親とは全く連絡をとっていない。きょうだいから話を聞くことがある程度」と語る。

Fは、施設から父親のいる家庭に戻った後、非行等により児童自立支援施設に入所。家に帰ったものの、「パパの帰りが遅く、寂しかった。しょっちゅう、施設に遊びに来ていた」と語る。施設退所後は、10代で出産、パートナーからのDV、借金等、「波乱万丈、自分でやっていくしかなかった」と語り、現在は「今の彼と前の夫と子どもとの生活を続けたい」と語る。きょうだいと頻繁に交流があり「一番の支え」になっていて、父親との関わりもある。

Gは、母子生活支援施設退所後、地域で母親ときょうだいと生活するが、「家の中が大変で、学校にも行けなくて、万引きをして空腹を満たしていた」。きょうだいと児童養護施設へ入所、しかし、施設ではいじめや喧嘩等安心できる生活ではなく、家庭復帰となる。家庭復帰となっ

た経緯についてGは「よくわからないけれど、私の万引きとか問題行動とかがひどくて家庭に戻ったら落ち着くのではないかと判断されたと思う」と語る。その後、別の児童養護施設に入所、高校卒業とともに退所し、ひとり暮らし。現在は夫との生活で妊娠中である。施設退所後は、就職して自活、大学へ進学するが、「仕事も生活も自分でやっていくしかなくて、いつも不安だった。人をどう求めたらいいか、助けてもらったらいいいかもよくわからなくて。ずっと生きづらさを抱えていた」と語る。母親とは距離をおいて生活。施設経験のある仲間や、友人、夫が支えになっているという。

次に、家庭復帰後に再措置が無かったE、H、I、Jであるが、Eは高校中退、家出、友人宅やひとり暮らしを経て結婚、Hは、又親との同居が「期待していた生活ではなく、大学卒業まで我慢」した後、ひとり暮らし、Iも「母親との暮らしを期待していたけれど甘かった」と語り、就職後、母親の生活保護受給を機にひとり暮らし、その後結婚、Jは「実際帰ってみると居場所がなくて、環境が悪かった」、「高校卒業までは我慢して親と同居し、お金を貯めてひとり暮らしをめざしていた」と語る。4人ともに抱いていた親との生活への期待や憧れは、その通りではなく、様々なトラブルや葛藤しながら自活する道を選択し、親との距離や関係のとり方を試行錯誤して現在に至っている。HとJのように、親との不和や葛藤を経て20代以降に、比較的良好な関係になっていく場合もあった。

一人ひとりの個別事例については、さらに掘り下げて検討する余地がある。しかし、ここで確かにいえるのは、施設退所後の家庭復帰は、社会的養護におけるケアや支援の終結を意味するものではないという事実である。むしろ、家庭復帰後に、親子関係や家庭での生活に関するリスクを考慮し、自立支援計画の中に家庭復帰後の支援を組み込んでいくべきであろう。

4. 支援過程全体を通して

このような結果から、支援過程においては、アドミッションケアからインケアにかけては、親子分離や施設入所という子どもにとって生活環境が大きく変わることをふまえ、安心、安全、愛情、基本的信頼感など育てられているということを子ども自身が感じられるようなケアや支援が求められる。

インケアからリービングケアにかけて、子どもとは、施設退所や家庭復帰時に予測される困難や課題と対処について話し合うことや、困った時にいつでも相談できる関係づくり、相談先として入所していた施設を窓口には複数の選択肢がある等を構築しておくことが重要である。

アフターケアでは、家庭復帰後の継続した見守り（モニタリング）と、必要に応じた介入や機関連携の必要性が求められるであろう。特に、被虐待等がある場合、退所後の支援について少なくとも3年間の見守りが必要であることが今回の聞き取りからは示唆される。

さらに、社会的養護の課題として大きいのは、入所した子どもへのケアや支援だけでなく、親への支援について、子どもの入所直後から同時並行的に進められなければならないだろう。

その際、個々のケースにもよるが、親の状況を子どもが知り、子どもの状況を親が知ることで、退所後の生活や家族関係のあり方に見通しをもちつつ、十分なアセスメントのもとに探っていくことも検討される必要がある。

V. 結びにかえて——本研究の限界と今後の課題

本稿では、先行研究をふまえ、社会的養護を受けた人々への生活史聞き取り調査を通して、支援に関する課題を考察することを目的とした。特に施設退所後に家庭復帰をした人々への生活史から、その生活と家族関係・社会関係に焦点をおいて検討し、支援の過程に則して課題を検討した。

その結果、導かれたのは、先行研究の成果と重なる知見を得たことに加えて、特に、以下の4点があげられる。第一に、施設から家庭復帰という措置解除は、社会的養護における支援の終結を意味するのではなく、むしろ予測される危機を考慮したモニタリングと危機への対処という支援が必要である。第二には、家庭復帰後にも子ども/当事者がSOSを発信できるような関係を施設入所中から施設との間で構築しておくことである。その場合、担当の職員がいなくても施設全体として受け入れられるような関係の形成と、施設だけではなく複数の社会資源（例えばシェルターや当事者団体、福祉事務所等）を入所中から紹介しておくことも大切であろう。第三には、親への支援は、社会的養護における入所措置から同時並行的に進められなければならないという点である。それがなければ家庭復帰という選択肢は、子どもにとっても親にとっても、不幸な結果になってしまう。第四には、施設退所後のアフターケアにおいて、子ども/当事者のライフステージに即した支援が求められる点である。本稿では十分に検討できなかったが、20代、30代と、就職や結婚、子育て等において、生活上の不安や困難を抱えた時に、相談できる関係性を社会的養護における施設を後見的な窓口としながら他の社会資源、社会サービスの利用に結びつけるような支援が求められるであろう。親世代、入所した子どもの世代、その子どもの次の世代という三世代を見越した支援という長期的な視点が、社会的養護には求められるのではないだろうか。

本研究は、調査対象の選定やデータの抽出と解釈の妥当性等、分析方法に関する課題がある。調査協力者については、施設等からの紹介を得ている時点で、その施設との関わりが比較的保たれているという点がある。したがって、収集したデータに、偏りがあることは否めず、調査結果からの普遍化、一般化について課題を残している。また、生活史を聞くという質的研究の方法と分析にあたり、今後さらなる検討が必要である。今後の課題としたい。

表2 調査協力者の生活と家族関係・社会関係（概要）

	入所前	入所中（最初の入所措置）			退所・家庭復帰後～現在	
I D	① 地域生活、家族・社会関係	② 入所の経緯/きっかけ	③ 生活、社会関係（入所期間）	④ 家族・家庭との関わり	⑤ 退所・家庭復帰の経緯/きっかけ	⑥ 家庭、地域での生活 家族、社会関係
A・10代・男性	幼少期：両親離婚。母、義父と生活。母は夜まで仕事で保育園の迎えも遅く「寂しかった」。小学校期：「2年生頃から学校で毎家庭でも問題児。寂しくて母に相手して欲しかった。父が義父とわかってショックだった。万引き、家出を繰り返し何度も兄相一保を経験。「兄相は面倒を見てくれる所」。両親に放火の疑いをかけられたり、「実の父に似ていてムカつくと言われたり」、「人としてみてもらえず、全否定される感じ」。祖父母（別居）は優しくかった。	小6：家庭自立支援施設へ。「何度も兄相に行ったりして問題児だったから、施設に入れたらいいな」と思っていた。入所してから「兄相の疑いがあつたからだとする」。両親に放火の疑いをかけられたり、「実の父に似ていてムカつくと言われたり」、「人としてみてもらえず、全否定される感じ」。祖父母（別居）は優しくかった。	「施設での生活の方がすごく充実していて楽しかった」。「青春」、「達成感」、「やるこゝろが沢山」。スポーツ・学習で表彰。選手に選ばれて職員や寮の友人から期待され嬉しかった。好きな人もできた。最初の頃の1ヶ月の反省室の経験は「身に覚えがなく大人は勝手だな」と思っていたけれど「言うことを聞いてすぐ謝ったらその後、褒められるようになって…」。(約1年10ヶ月)	春休みの外泊（家庭居場所がない、つまらなくて親に頼んで祖父・母宅に行った。祖父・母が自転車で行く練習を思ってくれ」と。自分はこのまま施設にいてもいいと思えたけれど。	中1末：施設長が、施設での生活をみて判断して決めたのだと思う。ある日呼び出されて、「良く頑張っているね」と褒められて母宅に行った。「いい子なので、入所して、母が自転車で行く練習を思ってくれ」と。自分はこのまま施設にいてもいいと思えたけれど。	中2の4月：家庭から、地元中学へ進学。勉強・クラブ等についていけず、集中できなかった。家では親と喧嘩、親を信用できなくなて、「ドカーンと爆発」。家出、万引き、兄相の繰り返し。死んでしまいたいと思ったこともあったけれど、友人が「そんなとしても変らないよ」と言ってくれた。 高校合格後、祖父母は喜んでくれたけれど、親からは授業料を払わないと言われて爆発、家出、中退。16歳頃、祖父母宅で警察に保護され、家裁、鑑別所、補導委託でb自ホームに入居（3ヶ月）→家庭（義妹が出生、万引き）→警察→家裁（弁護士サポート）→c自ホーム（1年）→家庭（義父と喧嘩。b自ホームに相談）→b自ホーム（1年）→退居・独居（時々、友人宅）。 現在：独居。自ホーム職員は「今も大切な、親のような存在」。友人、彼女も大切。仕事はトラブル等長続きせず遊びたくなることも。求職中。母の電話には「心配しているのかな」と。「仕事をして彼女と結婚したい」。「大切な人とはつながり」「窮地に落ちることに慣れてしまつて、それではいけないと思う」。
B・20代・女性	幼少期～中学：両親との3人暮らし。幼少期は既に独立。両親の不和、DVで「怖くて隠れていた」。親は早朝から夜遅くまで仕事、衣食住環境も困難。学校ではいじめを受けたり、友人もあまりいなかった。不登校の時もあった。中3頃、母の家出により、父の飲酒、自分への暴力がひどくなる。	中3年2月頃：父と喧嘩。理由が「高校進学を反対され、受験費を出せない」と言われて。中3頃、母の家出により、父の飲酒、自分への暴力がひどくなる。	15、16歳頃：d自ホームで生活しながら仕事もしたが、職場でのトラブルが多く、人間関係もうまくいかなかった。転職・退職を繰り返して、d自ホームの生活もうまくいかなかった。2ヶ月頃、母の家出により、父の飲酒、自分への暴力がひどくなる。	たまに、きょうだい宅へ電話。飛び出して、きょうだい宅へ戻る。母は、家を出た後、婦人保護施設にいたと思う。	d自ホームでの生活がうまいかきょうだい宅へ戻る。母は、家を出た後、婦人保護施設にいたと思う。	16歳頃：「きょうだい宅にいられなくなつて」→兄相→e自ホーム（半年）。「ようやく人生が変わった」「でも、うまくいかなくて」→（婦人保護施設を出た後の）母宅で同居（2年間）。「母に甘えられた」、「ほっとした」。でも、また家を出たくなつて、e自ホームから届いた通信（郵便）を頼りに、またそこで生活したいな」と。→e自ホーム「心地よかった。仕事や生活、資格・免許の相談もできた」（約2年）→19歳頃、退居・独居。 現在：独居。求職中。結婚は想像できない。声優になりたい。eホーム職員に仕事・生活の相談。趣味を通じた友人やネットの友人がいる。きょうだいと電話、母からたまに仕送りあり。「eホームは、つながれる大切なところ」。父との関わりは「絶ったまま」。
C・20代・女性	幼少期～：両親の離婚により、母、きょうだいと生活。母が「精神病で、きょうだいの暴力、自分には「手をあげたことはなかった」。母が爆発してきょうだいを投げ飛ばし、救急車が来たこともあった。近所の人に「本当のことを言えなかった」。男性が入替わり泊まりに来て嫌だった。生保受給。いつも空腹（衣食住環境困難）。友人がいた。時々不登校。	小3頃：母に「いいところに来ていてあげると言われて、楽しかった」。平和な生活が続いた。職員は親代わり。親友、好きな人。学校の先生と交換日記。勉強も嫌じゃなかった。中学頃：勉強や遊び、友人もいて、充実。「青春の場所」（約7年）。	小3頃～、最初は泣いてばかりで、不登校気味→徐々になつていく。成長を実感。衣食住も安心。「平和な生活が続いた」。職員は親代わり。親友、好きな人。学校の先生と交換日記。勉強も嫌じゃなかった。中学頃：勉強や遊び、友人もいて、充実。「青春の場所」（約7年）。	小3、4頃：母とf施設で面会。分大丈夫かなと、親との生活が当たり前と思つた。自立訓練等。小5頃：外泊で泊3日家で帰ったりもしていた。	中3頃：「家に帰りたいと憧れて。離れて生活していた分大丈夫かなと、親との生活が当たり前と思つた。自立訓練等。小5頃：外泊で泊3日家で帰ったりもしていた。」	中3末：「家に帰つてからは何かと大変で」、母からの暴力。衣食住困難。「我慢するしかなかった」。友人、近所の人心配。f施設職員の家庭訪問にも「本当のことを言えなかった」。「施設に戻りたい」と、今さら言えないのうなづいて。高2頃：通学困難。友達ノートを借りて勉強し卒業→就職（正規）後は、欠勤増。知り合いや職場の人から心配と助言。役所に書類提出に行き（2回目）「やつと本当のことを言えた」→gシェルター→18歳頃、h自ホーム「止まった時間が戻つてきた」（約1年半）→退居・独居。 現在：h自ホーム職員他、専門機関の連携支援あり。母とは連絡をとっていない。きょうだい心配。職場の信頼を回復、仕事も順調。恋人と結婚予定。「頼れる人に相談したい。人生を後悔したくない」。 「h自ホームは、なくてはならないところ」。

施設退所後に家庭復帰をした当事者の生活と支援（伊部恭子）

表2 調査協力者の生活と家族関係・社会関係（概要）

	入所前		入所中（最初の入所措置）			退所・家庭復帰後～現在
	① 地域生活、家族・ 社会関係	② 入所の経緯/ きっかけ	③ 生活、社会関係 (入所期間)	④ 家族・家庭 との関わり	⑤ 退所・家庭復帰 の経緯/きっかけ	⑥ 家庭、地域での生活 家族、社会関係
D・20代・女性	幼少期：父から母へのDV。自分への暴力無く、父が大好き。保育園の先生が好き。小4頃、父の死で「人生が変わった」→母・きょうだいの生活。母の飲酒、入院。衣食住困難、時々不登校。生保受給、福祉事務所の人が家に来ていた。	小5頃：学校で先生から「家に帰ってほしい」ときょうだいで見た相保→児童養護施設へ。	最初は不安だったけれど、きょうだいと同じ部屋で溶け込んでいった。安心・安全、衣食住の心配が無くなった。学校に行くことができた。文房具を買えた。施設の先生に甘えられた。友達もできた。(約2年)	母からの電話には出なかった。家に帰りたい。施設の先生がそれ支えてくれた。	中1頃：母の希望で仕方なく帰るとに。母に条件(飲酒、食事)を伝え、約束してもらった。施設の先生と母と一緒に話した。	中1：「母に裏切られ、施設に帰らなかった。躁鬱につきあうのも嫌だった」。衣食住困難、不登校。中2の中頃、「自分の意志で」i施設に戻った。「やっとな並みの生活」。「施設の先生に甘えられた」。施設から高校進学→短大（学費を施設から借りる）→卒後就職、退所、独居→妊娠・結婚・出産・家庭（夫・子） 現在：i施設の紹介でバイト。生活は大変だけれど夫と頑張っている。母とは全く連絡を取っていない。施設職員から妊娠・出産時のサポート、相談・見守り。「人並みのちゃんとした人生を歩みたい」。施設職員は「今も見守ってくれる。出会えて良かった」。
E・20代・女性	あまり覚えていない。後から（小4頃）、3歳頃に、親が離婚して、施設にいくことになったと施設職員から聞いた。	3歳頃、父に連れられてi児童養護施設へ。きょうだいと衣装ケースと一緒に来た場面覚えてる。	楽しかった。友達もできた。犬を飼ってくれて自分が名づけて嬉しかった。バザーがあったり、富士山に登ったり。いつも誰かが施設にいて、職員に甘えていた。(約9年)	家が近くて外泊(週1)。父に会いたくて夜中に帰ろうとして職員に止められたことも。	施設も良かったけれど、姉が先に1。父に帰っていたので。小6頃、「家に帰りたい」と施設職員に言っ	小6頃：父の帰りが遅く、寂しくて、施設にしょっちゅう、遊びに来ていた。中学は「いたって普通」に通う。高校は面白くなく数ヶ月で中退→「父が鬱陶しくなっ」て家出、バイト、彼と同居、離別→18歳頃、結婚、19歳出産、産後鬱に→夫と別居を経て同居。 現在：無職。夫の扶養、子ども3人。妊娠・出産、鬱の時等、きょうだいに相談。夫と姑からの支え。実家の父、母との関わりも。施設職員とは友人の墓参りや、電話等。「子どもは自分の手で育てたい」。
F・20代・女性	5歳頃、ある日、朝起きたら母がいない。父が「起きろー!」と。テーブルに置き手紙があった。父が保育園に電話していたのを覚えている。小2か小3の時、離婚していたとわかった。	5歳頃、朝起きたら母がいない。その後、きょうだいとk児童養護施設へ。	j施設もよかったけれど、家に帰らなかった。「いっぱいワルをしていたような(笑)、やばかった。」施設では太鼓を習っていて、小学校の頃は、家に帰ってからも「太鼓の日には絶対施設に来ていた」。(約7年)	家が近くて、外泊。週1で父が迎えに来てくれた。父が好きだった。	家に帰りたい。施設職員と父と私で話合っ	小5末に家庭へ→父の帰りが遅く寂しかった。晩御飯とか、施設職員や学校の先生、親戚が来てくれた。k施設に遊びに行ったり。家出、非行、同棲、不登校。中3頃、鑑別所→1児童自立支援施設(約3ヶ月)→家庭→家出、同棲、出産(17歳)→夫のDV・借金・転居→離婚→再婚・家庭・19歳出産→離婚 現在：家庭（子ども2人・パートナー・時々元夫）、収入は、元夫と今の彼から一部得て、自分も就労。波乱万丈、何でも自分で決めて、ずっと働いてきた。託児所や学童保育では子どものヤンチャで「保育できない」と言われ「どうしていいかわからなかった」。昼から夜の仕事に。きょうだい支え。父や母とたまに電話。「思いやりのある子に育ててほしい」。「k施設は楽しかったところ、なつかしい」。
G・20代・女性	幼少期～、父のDV・飲酒、母の喧嘩や家出、両親離婚→母ときょうだいの生活。何度か転居。衣食住困難。足の踏み場がなく、ガラスも落ちていて「痛くないようにボールに乗って伝い歩きをしていた」。保育園の時の写真も暗い顔で「笑っていなかった」。小学校の記憶もあまりない、行けてなかったかもしれない。	小2の頃、母に連れられて、きょうだいとm母子生活支援施設へ。	小2の頃、施設では、断片的な記憶。施設は暗く、くさかったと思う。母は、折り合いが悪く、喧嘩が多かった。学校には行けるようになった。「ずっと、人に甘えたり、求めたり、期待したりというのが苦手だったと思う」。(約1年)	母・きょうだいと一緒に生活。母の喧嘩が多く、母のグチの聞き役だった。父に電話をかける前に切ってしまったこともあった。	母が施設の利用者とトラブルを起こし、退所することになった。	家庭（転居繰り返し。不登校、母・きょうだい喧嘩→小4頃n児童養護施設(安心、安全でない生活。万引き等)→小6頃、家庭(衣食住困難、不登校)→小6頃o児童養護施設(中3頃、父の死)→高校進学(勉強、課外活動、バイト)→卒業、退所→18歳、就職(住込み、不安・孤独)→大学進学(仕事、居住の場不安定、生きづらさ、友人との出会い)→卒後就職→転職→結婚・家庭(夫・妊娠中)、仕事を継続。 現在：母への複雑な思い。夫、友人、施設経験のある友人、仕事関係での出会いと支えがある。施設は自分を救ってくれたところ。「幸せの尺度は、そのままの自分でいいと思えるかどうか」。「最近、人に助けてもらったりしてもいいんだと思えるようになってきたかな」。

表2 調査協力者の生活と家族関係・社会関係(概要)

	入所前		入所中（最初の入所措置）			退所・家庭復帰後～現在
I D	① 地域生活、家族・ 社会関係	② 入所の経緯/ きっかけ	③ 生活、社会関係 (入所期間)	④ 家族・家庭 との関わり	⑤ 退所・家庭復帰 の経緯/きっかけ	⑥ 家庭、地域での生活 家族、社会関係
H・ 20代・ 男性	0歳の頃、母の病死 →ひとり親家庭 (父、きょうだい)	母の死に より、0歳 の時、p乳 児院へ→ 措置変更 で2歳か らq児童 養護施設。	職員は親代わり。一緒にいた子どもはきょうだいのよう。職員に甘えたくて「見て見て光線」を出していた。学校、友達、楽しかった。安心。施設が育ててくれた。施設行事は「力を合わせることを学んだ。施設での体罰だけが嫌で、権利条約の説明を受けた頃から無くなった。(約18年)	時々、家に外泊。きょうだいが優しくて大好きだった。ただ、きょうだいは家庭にいたので羨ましくもあった。	高3の頃、大学進学に向けて、家のほうが受験勉強しやすかった。父と暮らしたいという憧れや期待もあった。施設職員に伝えた。	高3夏、家庭→最初は嬉しかったけれど、父と喧嘩、ストレス、「同居は安易で間違い」、「生き方を否定されたように」思った。「見えない年月がお互いの溝をつくっていた」。元q施設職員に電話し相談→大学進学後（学費は父）、バイト友人、彼女宅。父と距離をおくように「大学時代には、自分をふりかえることができた」。→卒業後、就職（正規）、独居。仕事では、施設での様々な経験が役に立っている。 現在：父が亡くなる前、「最近、どうだ？」と。自分を認めてくれたのが嬉しかった。今は、父も大変だったと理解できるし誇りに思う。きょうだいや、職場の人、友人、施設の元職員、施設にいた仲間等が支えに。「いろいろな人に育ててもらった。そのバトン」を、仕事を通して子どもにつなぎたい。「人とのつながりが一番大きい」。「施設は心のふるさと」。
I・ 30代・ 女性	幼少期、父から母へのDV、両親離婚。転居、小学校転校を繰り返す。再び父母同居後、小4頃、母の家出→父、きょうだいと生活。最初、父は家事を頑張ってくれていた→「育たない」意識。妹は栄養失調。衣食住困難。ガス・電気・水道が止まる。不登校。中学入学式は近所のおばさんが娘のお下がりの制服を貸してくれた。	中学2年頃：2度兄相一保。一度目父が「頑張る」と言って家庭に。2度目は中学の先生からの「あなたの意思充実して、楽しかった。施設の子と喧嘩して飛び出した時、職員が迎えに来てくれた。」(約5年)	中2～、衣食住、「ほっとした」。安心・安全。お風呂も。妹の面倒をみてくれた。自分も職員にかわいがってもらい、応援してもらい、褒めてくれた。友達、学校、部活、充実して、楽しかった。施設の子と喧嘩して飛び出した時、職員が迎えに来てくれた。(約5年)	父が初めて面会に来た時、怒られずほっとした。中卒後の進路決定の頃、父から働いて稼ぐように言われて断った。	高3頃、母から「会いたい。一緒に住れよう」と連絡があった。最初に施設職員と母で話し合っ て確認してから、自分も含めて三者で話し合い、家に帰ることに なった。	高卒後、家庭（母と同居）。専門学校に進学（学費は施設に借りて）。母に甘えられると「過度な期待で、甘かった」→母の体調が悪くなり働けなくなって、自分の奨学金やバイト代が生活費に。イライラして家を飛び出したことも、r施設の職員に相談していた→専門学校卒業後、就職（バイト→正規）、母の生保受給により、自分は家を出て独居。「これが母から自立したということかなと思った」→結婚・家庭 現在：流産の時、夫とその両親、職場の人が支えに。施設の職員は育ての親。母とは距離をとりながら、今はよい関係に。父からは一度お金のことで電話があり、断ったきりに。妹の生活心配。「幸せは不幸の隣にある。大変な時こそ、いつも人に恵まれてきた。今はそれを人に返していきたい」。
J・ 30代・ 男性	幼少期、両親離婚→父と生活。父が自分を、母が妹を連れていった。妹とは「ほとんど面識がない」。	離婚後、多分、父に連れられて4歳頃にs児童養護施設へ。	ある程度小さい時に来たから、施設になじめてよかったのかもしれない。居心地がよかった。友達、学校、地域少年団のスポーツ等楽しかった。ガキ大将的な、ジャイアンみたいな感じだった。職員は、親のような存在。我儘も言ったり、育ての親。施設は、家のような、家族のような。(約11年)	s施設に、家に帰りたいと思った。施設よりも、自由っていうのがあったと思う。自分で決めて、家に帰った。	家に帰りたいかった。施設よりも、自由っていうのがあったと思う。自分で決めて、家に帰った。	中3頃：家に帰る（父、義理の母と同居）。定時制高校進学・就職（正規）→卒業→独居。定時制進学時から就労。4年行って高卒資格ととも一人暮らしを目指していた。家に帰っても期待と違って「環境が悪かった」。→高卒後、独居→転職を繰り返した。その数年間、晩ご飯やお風呂に入り、r施設に来ていた。断られたことがなくて、受け入れてくれた。→恋人の父の紹介で現職→結婚・家庭（妻、子ども2人） 20代半ばに、父から義母の入院費を出すよう言われ、「育ての親は施設」と言って、家庭もあるので断る。→その後、父との関わりが変わったように思う。 現在：仕事と家庭を大事にしていきたい。妻の両親が支えに。職場の仲間、実の父等とも交流。s施設職員は、育ての親。今も相談。s施設は灯台のようなもの。「あきらめずコツコツと継続が大事。子育ては不安もあるけれど体罰はしないと妻と決めている」。

注1) データはすべて調査時現在のもの。個人が特定されないようにしている。

注2) 表中の用語は以下のように略す。児童相談所 一時保護所: 児相一保/自立援助ホーム: 自ホーム/生活保護: 生保

〔注〕

- (1) 本稿で取り上げる生活史聞き取り調査において、当事者の入所/入居していた施設は、児童養護施設、母子生活支援施設、児童自立支援施設、自立援助ホームであった。詳細は、後述の「Ⅲ. 研究の視点と方法」を参照されたい。なお、施設種別の名称は、周知のように1997年の児童福祉法改正により変更がなされている。本稿では、調査協力者の中で1997年以前に施設入所していた場合にも、法改正後の名称に統一した。例えば、法改正前に教護院に入所していた場合、児童自立支援施設と表記した。
- (2) 例えば、以下の文献を参照されたい。Stuart, T. Hauser, Joseph, P. Allen and Eve, Golden (2006) *Out of The Woods : Tales of Resilient Teens*, Harvard University Press (=2011, 仁平悦子・仁平義明訳『ナラティブから読み解くレジリエンス——危機的状況から回復した「67分の9」の少年少女の物語』北大路書房。)
Mark, W. Fraser, ed. (2004) *Risk and Resilience in Childhood : An Ecological Perspective*, 2nd Ed., National Association of Social Workers. (=2009, 門永朋子・岩間伸之・山縣文治訳『子どものリスクとレジリエンス——子どもの力を活かす援助』ミネルヴァ書房。)
- (3) 藤村はまた、生, life の3つの構成要素について、「〈生〉とは、身体的活動としての〈生命〉を媒介に、日々の生活経験（〈生活〉）と時間経験（〈生涯〉）を私たちが達成していく軌跡であると考えられる」と述べている（藤村2008：264-265）。
- (4) ライフ・イベントについては、例えば、以下の文献を参照されたい。嶋崎（2008：32-33）、会沢他（1998）、片瀬（2003）。
- (5) 例えば、青少年福祉センター編（1989）『強いられた「自立」』では、「要養護高齢児童の養護問題」に関する調査と、実践内容の検討をふまえ、制度的対応の課題に加えて、施設退所者の日常的なネットワークとサポートネットワークの持続的な必要性を述べている（遠藤：194-202）。同書では、親の貧困の継承、家庭崩壊後の親支援の欠如と家庭復帰の困難さ等も指摘している（山下：171-193）。また、西田編（2011）、谷口（2011）は、児童養護施設入所児童の生活の過程における社会的排除の問題を指摘する。青少年福祉センターによる調査研究と、西田他、谷口による研究には、約20年の開きがあるが、貧困の世代間連鎖、生活困難・課題の多様性と複合化、家族関係や社会関係に関する課題、障がいその他の事情により経済的・社会的に自立困難な子どもへの支援など、課題の多くが共通する。
- (6) 例えば、才村は、「援助が必要なのは、同居の有無を問わず、家族機能が不全状態にあるすべてのケースであることを強調しておきたい」と述べ、家族の再統合を「同居、別居を問わず、不全状態に陥っていた家族機能が再生され、家族の各構成員間の緊密で安定的な情緒の関係が構築又は再構築されることにより、1つに統べ合わされる状態」と述べている（才村2005：271-273）。
- (7) 例えば、桜井は、ライフストーリーを「個人のライフ（人生、生涯、生活、生き方）についての口述（オーラル）の物語である。また、個人のライフに焦点をあわせてその人自身の経験をもとにした語りから、自己の生活世界そして社会や文化の諸相や変動を全体的（ホリスティック）に読み解こうとする質的調査法の一つのことでもある」と述べている。また、ライフヒストリーとの違いについて、ライフヒストリーは、「その描かれる人生が主に時系列的に編成されている」とし、「典型的には、幼年期、教育期、就職、結婚などのライフ・ステージや人生で遭遇したさまざまな出来事を含むものであり、一つの描き方のパターンがある」、「資料としても、インタビューによるオーラル資料のほかに自伝、日記、手紙などの個人的記録を主要な資料源として利用する」と述べている（桜井2012：6-11）。また、有末は、生活史研究の意義を、第一に「人間の全体性、総合性、（自然界に対する）相対性を重要視しながら、哲学や形而上学よりは具体的な日常生活の歴史的、モノグラフ的様相を記述」することに徹し、第二に、「個人の当事者性や調査の立場性に

留意し、調査者と被調査者との間で構築されていく対話的インタビュー」を重視し、「生活史における事実や証言の要素」に最も重点を置き、「歴史的事実」を前提としつつ、「フィクションや物語の虚構性も含むこともあるという点」を考慮すること、第三に「語りえないこと」や「語らないこと」の重要性を考えておく必要があるとする(有末2012:2-3)。このほか、オーラルヒストリー、ナラティヴ、語り、など関連する概念を含めて整理を行う必要があるが、紙幅の都合から別途改めたい。なお、「生活史」という語は、歴史学や民俗学等において生活習俗の歴史を意味することもあるが、本稿では、口頭で語られた生、生活、lifeを主眼とする。

- (8) 1952～1997年の各年の調査結果は厚生省児童家庭局「養護児童等実態調査」、2003～2008年の各年の調査結果は、厚生労働省雇用均等・児童家庭局「児童養護施設入所児童等調査結果の概要」による。
- (9) 家庭支援専門相談員(ファミリーソーシャルワーカー)は、「虐待等の家庭環境上の理由により入所している児童の保護者等に対し、児童相談所との密接な連携のもとに電話や面接等により児童の早期家庭復帰、里親委託等を可能とするための相談・指導等の支援(以下「家庭復帰支援」という。)を行い、入所児童の早期退所を促進し、親子の再構築等が図られることを目的」とし、乳児院、児童養護施設、情緒障害児短期治療施設、児童自立支援施設に配置された(厚生労働省雇用均等・児童家庭局 通知「乳児院等における早期家庭復帰等の支援体制の強化について」2004年)。児童相談所、児童家庭支援センター等の関連機関・施設との連携による支援が求められている。
- (10) なお、本稿に関わる研究全体の調査協力者は、措置解除となり、施設退所後に家庭復帰ではなく、地域でのひとり暮らしとなった者を含む計31名(年齢は10代～40代。平均27.6歳)である。繰り返しになるが、本稿では、31名中、施設退所後に家庭復帰をした10名を分析の対象とする。
- (11) 研究者と調査協力者との関係性については、既に様々な指摘がなされているが、例えば、藤原(2006: v-vi)は、N.K. デンジンとY.S. リンカン編の『質的研究ハンドブック 第2巻 質的研究の設計と戦略』の翻訳と編集作業をふまえて次の二つの論点をあげている。その一つは、研究者と「研究参加者(participant)」の関係性、二つ目は、研究者と研究「結果」の受容者(読者)の関係性である。一つ目の、質的研究における研究者と研究参加者との関係性にかかわる論点では、まず、「データの『社会的構築』という問題」があり、参与観察やインタビューなどから得られるデータは、「現実をあるがままに写しとったものではなく、研究者と研究参加者の『相互行為』をとおして、社会的・言語的に構築され」たものであることを指摘する。すなわち、研究者と研究参加者との関係には、「データ構築における共同性という性格」が見出されるのである。したがって、インタビューなどの調査の対象者やインフォーマントは、意図的に「参加者」、「共同研究者」という用語が選好されている(本稿では、「調査協力者」とした)。また、ここでは、研究倫理の問題もある。藤原は、「研究参加者への研究計画の明示、その人権や自由意志の尊重、その個人情報保護や研究参加における安全性への配慮などについての『インフォームド・コンセント』にかかわるもの」をあげている。次に、二つ目の論点、研究者と研究「結果」の受容者の関係性についてである。これは、「質的研究の結果にかかわる、『物語(story/narrative)概念』への論及」について、特に研究結果の「一般化可能性」という点に表れる。量的研究に比べて、「相対的に個別的な現実への焦点化の度合いが高い質的研究では、その研究結果が、人が経験したり社会過程上生じた、さまざまな出来事に関連づけと意味づけを記述した物語的『テキスト』の形をとる」ことが多く、「研究結果の『著述』全体としては、データの分析や解釈から得られた理論的『カテゴリー』が当然含まれるものの、そうした著述の基本的モードは、物語的様式をとることが多い」が、その場合の研究結果の「一般化可能性」をどう考えればよいのかという問題である。これについて、藤原は、「研究結果として、その受容者(読者)が『自然な一般化』を行える

ようなテキストを生み出すことが、1つの重要な課題」になると述べる。つまり、「研究結果としての物語の読者は、その物語から別の現実にも適用可能な含意を、みずから引き出すことがある」ことをふまえるという点である。こうした論点をどのように克服していくかについては、本研究においても引き続き検討課題である。

〔参考文献〕

- 阿部彩（2008）『子どもの貧困——日本の不平等を考える』岩波新書。
- 相澤仁（2008）「施設退所後の年長児童への新たな支援策」『社会福祉研究』103, 47-53.
- 会沢勲, 石川悦子, 小嶋明子編（1998）『移行期の心理学——こころと社会のライフ・イベント』ブレーン出版。
- 有末賢（2012）『生活史宣言——ライフヒストリーの社会学』慶応義塾大学出版会。
- 浅井春夫, 松本伊智朗, 湯澤直美編（2008）『子どもの貧困——子ども時代のしあわせ平等のために』明石書店。
- 遠藤野ゆり（2009）『虐待された子どもたちの自立』東京大学出版会。
- 林浩康（2008）『子ども虐待時代の新たな家族支援——ファミリーグループ・カンファレンスの可能性』明石書店。
- 原史子（2005）「児童養護施設入所児童の家族的背景と家族への支援（1）」『金城学院大学論集 社会科学編』2（1）, 47-66.
- 藤村正之（2008）『〈生〉の社会学』東京大学出版会。
- 古川孝順（2008）「第9章 社会的養護と規制改革——変動する社会の児童養護施設」『社会福祉研究の新地平』有斐閣, 228-263.
- 伊部恭子（2012）「社会的養護を受けた人々に聞く生活史——施設入所に至る経緯と入所後約1年に着目して」『社会福祉の理論と運営——社会福祉とはなにか』筒井書房, 352-377.
- 伊藤嘉余子（2012）「生活型福祉施設におけるソーシャルワークの介入と調整——児童養護施設実践に焦点をあてて」『ソーシャルワーク研究』38（2）, 100-106 頁。
- 伊藤嘉余子（2011）「児童養護施設退所児童のアフターケアに関する研究——アンケート調査からの分析」『子ども家庭福祉学』10, 35-45.
- 岩田賀奈子, 芝野松次郎, 山岡美智子, 原佳央理（2006）「児童養護施設におけるファミリーソーシャルワーカーの役割分析——エキスパートインタビューの分析を通して」『子ども家庭福祉学』6, 13-22.
- 片瀬一男（2003）『ライフ・イベントの社会学』世界思想社。
- 河合直樹, 野口啓示（2007）「ペアレント・トレーニングを用いた家族再統合への援助」『子ども虐待とネグレクト』9, 373-383.
- 菅野恵・本永拓郎・春日喬（2009）「児童虐待と児童養護施設における家族再統合の諸問題」『帝京大学心理学紀要』13, 57-72.
- 北川清一（2010）『児童養護施設のソーシャルワークと家族支援——ケース管理のシステム化とアセスメントの方法』明石書店。
- 木原活信（2002）「社会構成主義によるソーシャルワークの研究手法——ナラティブ・モデルによるクライアントの現実の解釈」『ソーシャルワーク研究』27-4.
- 窪田暁子（1997）「序章 社会福祉方法・技術論を学ぶ人のために」植田章・岡村正幸・結城俊哉編『社会福祉方法原論』法律文化社, 1-23.
- Mark, W. Fraser., ed. (2004) Risk and Resilience in Childhood: An Ecological Perspective, 2nd Ed.,

- National Association of Social Workers. (=2009, 門永朋子・岩間伸之・山縣文治訳『子どものリスクとレジリエンス——子どもの力を活かす援助』ミネルヴァ書房.)
- Michael, White (2007) Maps of Narrative Practice, W. W. Norton & Company, Inc. (=2009, 小森康永・奥野光訳『ナラティブ実践地図』金剛出版.)
- 松本伊智朗 (2012) 「子どもの貧困と『重なり合う不利』——子ども虐待問題と自立援助ホームの調査結果を通して——」『季刊社会保障研究』48 (1), 74-84.
- 松本伊智朗 (2010) 『子ども虐待問題と被虐待児童の自立過程における複合的困難の構造と社会的支援のあり方に関する実証的研究』平成20・21年度厚生労働科学研究報告書 (政策科学総合研究事業).
- 松本伊智朗編 (2010) 『子ども虐待と貧困——「忘れられた子ども」のいない社会をめざして』明石書店.
- 村井美紀 (2007) 「児童養護施設における家族支援とソーシャルワーク」『ソーシャルワーク研究』32 (4), 14-19頁.
- 中野卓・桜井厚編 (1995) 『ライフヒストリーの社会学』弘文堂.
- 中田基昭編 (2011) 『家族と暮らせない子どもたち——児童福祉施設からの再出発——』新曜社.
- 中山正雄編集代表 (2008) 『ファミリーソーシャルワークと児童福祉の未来——子ども家庭援助と児童福祉の展望』中央法規.
- 西澤哲 (2007) 「家族の再統合——子ども虐待への対応における福祉と心理の協働」『社会福祉研究』98, 19-25.
- 西田芳正編著, 妻木進吾・長瀬正子・内田龍史 (2011) 『児童養護施設と社会的排除——家族依存社会の臨界』解放出版社.
- Norman, K. Denzin and Yvonna, S. Lincoln, eds. (2000) Handbook of qualitative research second edition, Sage Publications, Inc. (=2006, 平山満義監訳・藤原顕編訳『質的研究ハンドブック2巻 質的研究の設計と戦略』北大路書房.)
- NPO 法人ふたばふらっとホーム (2012) 『社会的養護施設等および里親出身者実態調査概要報告書 (平成23年度セーフティネット支援対策等事業費補助金 社会福祉推進事業)』.
- NPO 法人社会的養護の当事者参加推進団体 日向ぼっこ編 (2009) 『施設で育った子どもたちの居場所「日向ぼっこ」と社会的養護』明石書店.
- 野口啓示 (2008) 『被虐待児の家族支援——家族再統合実践モデルと実践マニュアルの開発』福村出版.
- 野口裕二編 (2009) 『ナラティブ・アプローチ』勁草書房.
- 大阪市児童福祉施設連盟養育指標研究会 (2010) 「今、施設で暮らす子どもの意識調査: 10年を経て——児童養護施設, 情緒障害児短期治療施設, 児童自立支援施設の10年」(2009年度 朝日新聞厚生文化事業団「子どもへの暴力防止プロジェクト (助成事業)」).
- 大塚類 (2009) 『施設で暮らす子どもたちの成長』東京大学出版会.
- 才村純 (2005) 『子ども虐待ソーシャルワーク論——制度と実践への考察』有斐閣.
- 桜井厚 (2012) 『ライフストーリー論 (現代社会学ライブラリー7)』弘文堂.
- 桜井厚・小林多寿子編 (2005) 『ライフストーリー・インタビュー——質的研究入門』せりか書房.
- 青少年福祉センター編 (1989) 『強いられる「自立」——高齢児童の養護の道を探る』ミネルヴァ書房.
- 芝野松次郎 (2004) 「施設ケアとファミリーソーシャルワーク」『社会福祉研究』第90号, 鉄道弘済会, 77-87頁.
- 嶋崎尚子 (2008) 『ライフコースの社会学 (社会学のポテンシャル2)』早稲田社会学ブックレット, 学文社.
- 社会福祉法人 全国社会福祉協議会 児童福祉部 (2009) 『子どもの育みの本質と実践——社会的養護を

- 必要とする児童の発達・養育過程におけるケアと自立支援の拡充のための調査研究事業 調査研究報告書——』。
- 『施設で育った子どもたちの語り』編集委員会編（2012）『施設で育った子どもたちの語り』明石書店。
- Stuart, T. Hauser, Joseph, P. Allen and Eve, Golden（2006）Out of The Woods : Tales of Resilient Teens, Harvard University Press.（＝2011, 仁平悦子ほか訳『ナラティヴから読み解くレジリエンス——危機的状況から回復した「67分の9」の少年少女の物語』北大路書房。）
- 鈴木浩之（2007）「『子ども虐待』への保護者参加型支援モデルの構築を目指して——児童相談所における家族再統合についての取り組み」『社会福祉学』48（3），79-93.
- 庄司順一研究代表（2007）「子どものライフステージにおける社会的養護サービスのあり方に関する研究（平成18年度厚生労働科学研究費補助金 子ども家庭総合研究事業）」。
- 谷口由希子（2011）『児童養護施設の子どもの生活過程——子どもたちはなぜ排除状態から抜け出せないのか』明石書店。
- 谷口由希子（2010）「児童養護施設で生活する子どもたちの退所の様相」『貧困研究』5，110-118.
- 田中理絵（2004）『家庭崩壊と子どものスティグマ——家族崩壊後の子どもの社会化研究』九州大学出版会。
- 津崎哲郎（1987）「児童相談所におけるソーシャルワークと福祉ネットワーク——養護児童の援助プロセスを通して」『ソーシャルワーク研究』13（1），14-21 頁。
- 東京都福祉保健局（2011）『東京都における児童養護施設等退所者へのアンケート調査報告書』。
- Uwe, Flick（2007）Qualitative Sozialforschung, Rowohlt Verlag GmbH.（＝2011, 小田博志監訳編『新版 質的研究入門——〈人間の科学〉のための方法論』春秋社。）
- 山野良一（2008）『子どもの最貧国・日本——学力・心身・社会におよぶ諸影響』光文社新書。
- 山田勝美（1998）「児童養護施設で生活する子どもたちの精神的自立に関する研究Ⅰ——アタッチメントセオリーを理論的基盤として」『純心現代福祉研究』4，9-19.
- 山田勝美（1999）「児童養護施設で生活する子どもたちの精神的自立に関する研究Ⅱ——ナラティブ・セラピーとその理論モデルとの検討を通して」『純心現代福祉研究』5，25-33.
- やまだようこ編（2007）『質的心理学の方法——語りをきく』新曜社。

【謝辞】

本調査研究にご協力をいただきましたすべての皆様に心から御礼を申し上げます。

【付記】

本論文は、2011～2012年度佛教大学特別研究費助成、2010～2013年度科学研究費補助金（基盤研究C，課題番号：22530645）「社会的養護における支援課題としての社会関係形成——児童養護施設経験者の生活史から——」（研究代表者：伊部恭子）に関する研究成果の一部を報告するものです。

（いべ きょうこ 社会福祉学科）

2012年10月31日受理